

令和3年度 自己評価表

鳥取県立鳥取聾学校ひまわ分校

中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (めざす子ども像) 【知】あそぶ・学ぶ・学び合う子 【徳】やさしくかわる・つながる子 【体】元気やめりぬ子
-------------------	---

今年度の重点目標	1 子どもが主役となる保育・授業づくりと確かな学力の定着 2 友だちやまわりの人に進んでかわかり、仲間としてつながりとする態度の育成 3 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成 4 自立と社会参加をめざしたキャリア教育 5 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善
----------	--

評価基準	A: 具体方策により期待する具体目標レベルに十分達している。⇒問題なし B: 具体方策により期待する具体目標レベルにほぼ達している。⇒特に問題なし C: 具体方策による期待する目標レベルには達していない。⇒経過を分析し、改善方策を検討 D: 具体方策が不十分で期待する目標レベルには達していない。⇒改善方策が必要
------	---

評価項目	評価の具体項目	年度当初		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策
1 確かな学力の定着 (子どもが主役となる保育・授業づくり)	○適切な目標設定による授業改善	・慣れない環境に不安になる幼児もいるが、流れややり方が分かると、見通しを持っていろいろな活動や遊びに取り組もうとしている。しかし、体験したことや思いを伝えることが十分に獲得しているとは言えない。 ・1日の流れの中に絵本に触れ合い、親しみ機会を設定していることで、絵本の世界を楽しむ様子が見られる。	・自分の気持ちや体験したこと、身の周りの出来事などを伝えるためのことばを獲得し、伝え合おうとしている。 ・絵本を読む楽しさや想像する楽しさを思い、想像したことを伝え合う喜びを味わいながら、絵本の世界を工夫して表現している。	・人に伝えたいという思いを育む様々な体験活動を設定し、体験活動をもとにした遊びなどの人のかかわりを通して、伝え合うことばの獲得の取組を進める。発達段階に合わせた写真日記の活用で1日の活動の振り返りと言語化へ向けたかかわりをしていく。 ・絵本に親しみ活動をもとに設定するとともに、多くの本に親しむよう学校図書館の活用を積極的に進める。
	○学ぼうとする意欲や思考力・表現力の向上	・学年に応じた学習に取り組む児童、個別に配慮が必要な児童など実態に幅があるが、それぞれが意欲的に学習に取り組んでいる。 ・手話、音声による表出、獲得語彙数、気持ちの表現方法等の実態に個人差が見られる。	・児童が主役となる授業づくりを進め、個々に学習を深めている。 ・児童がかかわり合いの中で、自分の意見や思いを自信をもって伝えようとしている。	・学力の定着を図るために、的確な実態把握を行い、実態や課題の共通理解を図り、児童に応じた指導・支援を行う。 ・教科を横断的にとらえ、ことばの指導を繰り返し行ったり、学習の足跡を提示し、既習の学習内容を振り返ったりする。 ・友だちや交流校児童とのかかわり合いの中で、自分の意見や思いを積極的に伝えることができるように、事前事後の学習で意識を高めていく。
	○コミュニケーション力の向上	・幼児児童は意欲的に活動や学習に取り組む、自分の考えを伝えよう、かかわり合おうとする姿が見られるが、獲得語彙やコミュニケーションの力の不十分さにより、基礎学力の定着や意思の伝達に課題が見られる。 ・これまで継続してきた一人一研究授業や参観ウィーク等の取組により、教職員の聴覚障がい教育への理解は深まってきたが、聾学校における自立活動やことばの指導に関して整理し、授業改善につなげていく必要がある。	・幼児・児童のそれぞれの実態に応じてことばの獲得と拡充が図られ、「伝える*考える*見つめる」ことによる自己表現ができていく。 ・全職員が研修や実践を通して聴覚障がい教育の専門性と指導技術を高め、聾学校における自立活動やことば、コミュニケーション、教科指導等についての理解が深まっている。	・ことばの獲得と拡充を図るための指導内容、指導方法等の検討(学部研・グループ研) ・一人一研究授業(事前・事後研修会)、授業研究会、ケース研究会、参観ウィークの実施による実態把握と支援の共通理解を促す確保。 ・「鳥屋スタンダード」「ひまわりスタンダード」の定期チェックによる教職員の意識付け。 ・自立活動指導プログラムの見直し・改善による、プログラムの有効活用。
2 友だちやまわりの人に進んでかわかり、仲間としてつながりとする態度の育成	○人とのかかわり主体的に生きる力の育成	・様々な遊びや発想に触れる機会が少なく、遊びに偏りがある。また交流保育の回数確保が難しく、大きな集団の活動に慣れていないところがある。 ・お互いにかかわりを持って活動しようとしているが、獲得していることばの量や実態の違いにより、伝え合うことが難しい場面が見られる。	・色々な友達と遊び、イメージを共有したり気持ちの折り合いをつけたりして、かわかることの楽しさを味わっている。 ・獲得語彙が増え、手話や音声等で自分の経験や気持ちを積極的に伝えたり、相手の気持ちを受け止めたりして伝え合うことを楽しんでいる。	・ルール性のある遊びや共同制作等を定期的に行う。交流保育についても交流園の啓発を含めて、かかわり方を工夫する。 ・手話での会話を積極的にしたり、伝え合う楽しさを実感できるように共通したり賞賛したりしている。
	○コミュニケーション力の向上	・友だちや他者とかかわって活動するのをお互いが、相手の気持ちを考えなかったり、受け止められなかったりすることがある。また、自分や友だちのよいところを自分から進んで見つけることが難しい。	・友だちや交流校児童等に進んでかわかろうとしている。 ・自分や友だちのよいところに気づいている。	・自信を持って相手にかわかることができるように、なかよしタイム等をふれあっていく活動する場を設定し、経験を積み上げていく。 ・自分や友だちのよいところが意識できるよう、教師がよいところを紹介したり、児童同士が発表し合ったりする場面を設定する。
	○健康安全管理	・乳幼児児童およびごみの各家庭では、安定した親子のかかわりが持っている。さらに、それを基盤としたコミュニケーションの中で、子どもがことばの力をつけていくことを保護者は期待している。	・親子のやりとりを育み楽しい活動を積極的に提供している。 ・保護者研修会の資料を整理し、系統立てて情報提供ができていく。	・親子のやりとりが活発になるように「絵本の読みきかせ」の活動をもとに、発展的な活動(制作活動や再現遊び)を設定する。 ・ことばの発達に重点を置いた保護者研修会の年間計画を立て、実施する。
3 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成	○健康で安全に生活する力の定着	・状況に応じて危険を回避することが難しかったり、危険であることが分からないまま行動したりする場面が見られる。 ・健康で安全に生活していくために必要なことについて、日々の生活と関連づける必要がある。	・体を動かす時間や遊びの中で危険な場所・状況などを理解し、安全な行動をとろうとしている。 ・健康で安全に生活するための知識が付ききて、生活リズムに気をつけて生活しようとしている。	・運動の時間などをしっかりと確保したり、安全に行動できる環境の設定を行ったりして、体を動かす環境の充実を図る。また、幼児と一緒に安全確認を行うことを徹底する。 ・養護教諭と連携をとりつつ、保健指導の時間を設定したり、規則正しい生活について確認したりする。
	○健康安全管理	・体を動かすことが好きな児童が多いが、物事に取り組む時に、自信がなく消極的になってしまったり、すぐにあきらめてしまったりする児童がいる。 ・自分で考えて季節や環境に合わせて着替えたり、自分の健康状態について正確に伝えられないことがあったりすることがある。	・自分から進んで体力づくりを行い、続けている。 ・発達段階に応じて、自分の健康状態を伝えたり、健康に生活していくための方法を身につけたりしている。	・体力づくりへの意識が高まるように活動場面を設定したり、体力づくりの様子を提示したりする。 ・保健指導での学習が生活に活かせるよう、十分に事後指導をしたり、家庭と情報提供等の連携を図ったりする。
	○健康安全管理	・新型コロナウイルス感染症の感染拡大により「新しい生活様式」の定着が浸透する中、マスク着用や手指の消毒が習慣化されてきている。十分な手洗い、「人との距離」や「こまめな換気」等を幼児児童が意識して実践できるようにしていく必要がある。 ・避難経路等緊急時の対応を繰り返し確認する必要がある。	・幼児児童が「新しい生活様式」を意識し、自分たちができていることを実践しようとしている。 ・避難訓練等を通して緊急時の対応を確認し、課題を検討している。	・「新しい生活様式」に関する提示を充実し啓発を図るとともに、実態に合わせたチェック表を作成し教師と一緒に確認する。 ・啓発文書を作成配布し、家庭と連携して指導を進める。 ・避難訓練等の事前・事後学習で緊急時の対応について考える機会を設定し、課題を整理し、対応等をまとめる。
4 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の推進	○関係機関との連携	・福祉、医療、行政等の関係機関と繋がりができているが、年間を通じて継続的な連携を図ることが難しい。	・内容や方法を工夫して、継続して関係機関と連携を図ることができている。特に西部地区の難聴特別支援学級の担任との連携が深まっている。	・きこえやことばに関する情報提供資料を整理し、相談のニーズにすぐに応えることができるようにする。 ・隔月で聴能だより「みみだより」を難聴児在籍園・学校に届ける。 ・難聴特別支援学級担任に困り感や情報交換したいこと等について定期的に聞き取りをする。 ・難聴特別支援学級担任情報交換会を実施する。
	○キャリア教育	・キャリア教育だよりや校内掲示など、キャリア教育に関する周知を適宜行うことで、保護者のキャリア教育への意識が高まりつつある。保護者と一緒に取り組むキャリア・パスポートの効果的な活用が十分でないところがある。 ・幼児児童の実態や課題について、キャリア段階表をもとに共通理解を図っているところであり、指導・支援の内容については確認をしていく必要がある。	・保護者のキャリア教育への意識が高まり、キャリア・パスポートにも積極的にかわかり、保護者との連携が良好である。 ・キャリア段階表をもとに、幼児児童の実態について教師間で共通理解が図られ、キャリア発達を意識した実践が組織的に行われている。	・キャリア教育だよりの定期的な発行や校内掲示の更新を継続して行うとともに、家庭でもキャリア・パスポートの取組に参加して頂けるよう、個人懇談等で保護者に説明する機会をつくる。 ・幼児児童のキャリア段階、課題や指導内容についてのケース検討会を設定し、指導にあたる教師間で共通理解を図る。
5 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善の推進	○業務改善	・一人あたりの時間外業務が多くなりがちである。年度末年度始や行事多忙期やまとめの時期に多忙となる。 ・業務の削減の検討はするもの一人一人にかかる業務が減らない現状があり、時間の使い方や会議の精選など再度検討する必要がある。	・どの職員も自分の働き方に対する意識が高まり、月40時間以上の教職員が0%になっている。 ・運営面で今までは違う考え方ややり方を取り込み、試してみることができている。	・自分の時間外業務時間の確認を促したり、「早く帰らあデイ」を設定したりして、計画的な業務の推進と健康管理の意識を高める。 ・コロナ対応の情報共有や対応や計画変更などを円滑に行えるように、職員朝会の時やグループボードなど使って日頃から情報共有する。様々な学習や行事などが業務過多にならないように、全体を調整する機会を定期的に設ける。